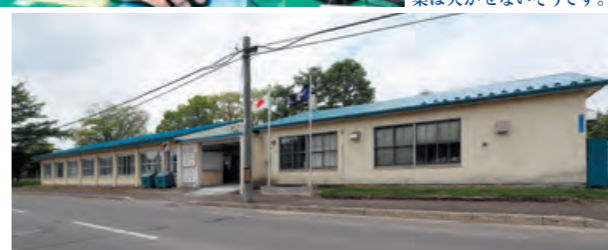


●中標津町の開陽地域にあるTMRセンターの草地管理部と連携し、スラリーを有効活用した施肥体系づくりに取り組んでいます。



●大規模化が進む道東でもスマート農業への関心が高く、新しい技術の情報収集は欠かせないそうです。



明日を語ろう！ 北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO



北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みをご紹介します。

●新たな技術の研究と普及で酪農の課題解決を図る 現場と関わることで課題が見える。 人や技術をつなぎ合わせながら、 地域の農業を支え、未来に貢献する。

「中標津町」

北海道根室振興局
根室農業改良普及センター北根室支所
地域係長

五十嵐将寿さん



●五十嵐さんは2023年4月に北根室支所に着任。乳牛と飼料作物、農業経営を専門に、生産者と課題を共有し、解決に向けた実証試験などを行っています。

●「新しい技術の研究や導入には、協力してくれる生産者の存在が何よりも大切」と五十嵐さんは言います。



道北の酪農家に生まれ 北海道の畜産を支える道へ

新しい生産技術の導入や普及などを支援することで地域の生産者と農業を守り、未来につなげる役割を担う農業改良普及センター。根室農業改良普及センター北根室支所で地域係長を務める五十嵐将寿さんは、地域の酪農家と連携し、乳牛の飼料作物の生産技術の向上や飼養環境の改善などに取り組んでいます。

豊富町の酪農家に生まれた五十嵐さんは、酪農学園大学で農業経済学を学びました。一時は家業を継ぐことも考えていましたが、大学での学びを通じて普及事業に魅力を感じるようになったそうです。「将来の進路に迷いを感じていたとき、大学の先生から『あなたに救われる

酪農家もいるのでは』と言われ、普及指導員になることを決めました」

五十嵐さんは大学卒業後、最初に配属された黒松内町で、希望していた畜産分野を担当。生産者の元に通い、現場で起きていることを見聞きしながら、酪農のノウハウや課題の解決方法を学んできました。その後、異動した釧路では、生産者が共同で出資し、牛の餌の供給を行うTMRセンターの立ち上げに関わり、大規模酪農の現場を経験。また、石狩ではICTを活用したピンポイント除草（草地更新）などに取り組みました。

五十嵐さんは生産者との密接な関わりの中で酪農にかける思いや努力を知り、あらためてその偉大さを感じたといいます。「酪農を持続させていくために、地域全体で生産力を向上させ、安全安

心なものをつくらうとしている人がたくさんいます。その考えに共感したり、独自のノウハウを聞いたりすることが楽しく、この仕事の魅力の一つだと思っています」

生産者と協力しながら 課題を見出し、解決を図る

北根室支所のある中標津町は、2万ヘクタールを超える草地と4万頭に迫る乳牛を擁する一大酪農地帯です。近年は飼養頭数の増加に伴って、自給飼料の不足が問題になってきました。ここ数年の輸入飼料・資材の高騰もあり、いかにコストを抑えつつ飼料の自給率を高めるかが重要なテーマとなっています。

この事態を打開するために取り組んでいるのが、TMRセンターの生産力を向上

させる活動です。自給飼料の品質向上と必要量の確保を目標に、サイレージの調製方法の見直しや牧草の収量を高める実証試験などを行っています。

また、スラリー（ふん尿混合液肥）の分析データに基づいて、その施用を計画的に行い、化学肥料の使用を抑える取り組みも行っています。現在は生産者と連携し、スラリーを散布した草地を定期的にモニタリング。スラリーを有効活用するとともに、適正な化学肥料を施肥することで、肥料コストの削減も支援しています。

五十嵐さんは「地域の農業が抱える課題を見出し、生産者と連携して解決を図るのが普及指導員の役目。こちらが提案したことに理解を示し、協力してくれる人たちのおかげで新しい技術が確立でき、普及に結び付く」と、生産者への感謝を口にします。スラリーの有効活用も、TMRセンターの構成員（生産者）が主体となり、施肥設計や草地での定点調査を実施しています。「実際の効果を自分の目で見て、実感してもらうことが大切。また、昨年は葉先が枯れる症状が出ましたが、モニタリングをしていたことで早期に対応できました」と五十嵐さんは言います。

地域の酪農を守るため 人や技術をつなぎ続ける

酪農の省力化や効率化に向け、ICTを使った技術の導入や普及を積極的に進めている五十嵐さん。コストと労力を軽減するため、デントコーンの除草剤散布にドローンを活用することを提案し、今年



●スラリーを散布した草地で定期的に定点調査を行い、牧草の生育状況を把握します。

から運用が始まっています。また、雪解け後、まだ乾いていない草地の裸地部分に、ドローンで播種を行う実証試験にも取り組んでいます。通常より半月以上前倒しで播種できるのがメリットで、生産者の関心も高いそうです。
夏の平均気温が20度程度の中標津でも、今後は暑さ対策を強化する必要があると五十嵐さんは言います。これまでメインの牧草だったチモシーに夏枯れが見られるようになったため、暑さに強いオーチャードグラスを試験的に栽培したり、生産者に向けて牛舎の暑熱対策のための設備を紹介したりするなど、今後の気候変動を見据えた対策を図っています。
「普及指導員は点と点を結ぶ仕事。さまざまな人と出会い、課題を共有し、その解決を図るために、人や技術、情報などをつないでいくコーディネーターでもあります。研究と実践を両立させながら地域の農業を支え、その発展に貢献できる仕事は面白く、やりがいも大きい」と話す五十嵐さん。今後は若い指導員の育成にも力を入れ、農業を未来につなげていくことをめざしています。